旅順「万忠墓記念館」から考えさせられた歴史問題

～～司馬遼太郎の歴史小説
「坂の上の雲」を考える～～

大津市　森野 昭

大連交通大学・国際文化交流学院
の元留学生

2014 年、大連に語学留学して、真っ先に訪問したのが旅順の日露戦争の戦跡であった。その訪問記については既にリポートした。

203 高地、東鶏冠山北堡塁などの訪問を終えて、旅順バスターミナルに戻ったとき、そこから歩いて 15 分ほどのところに「万忠墓記念館」があった。この記念館に関する歴史的考察をここで紹介する。

■旅順万忠墓記念館

記念館へ行くと、入り口の前に“正装”した中国人の若者 20 人ほどが入場するところだった。我々もその後につづいて入って行った。

中国語の説明はわからないものの、展示物や絵図を見て、この記念館の意図が直ちにわかった。日本兵が民間の中国人を多数虐殺していたのだ。なかには、若い女性を組伏せている日本兵の姿まで描いてあった。この事件は日清戦争のときに起こったものらしいが、私だけでなくほとんどの日本人は知らないだろう。

館内の展示は、私が 5、6 年前、江西師範大で日本語教師をしていたときに、南京市で見学した「虐殺記念館」の様子を彷彿させる残虐なものであったという。これは、日本軍が朝鮮（李氏朝鮮、後に大韓帝国と称した）で朝鮮の宗主国として出兵した清国の軍隊を破り、余勢をかって遼東半島に進軍したとき、旅順で戦闘中に清国兵だけでなく女子供を含む民間人を 1 万人以上の虐殺殺戮した、と言われる事件らしい。だが、私には疑念がある。

――「南京大虐殺記念館」で見たのと類似した残虐行為を日本軍が本当にやったのだろうか？反日をことさら煽る目的の中国の記念館にままあり得る“でっちあげ”では？

■日本は「戦時国際法」に忠実だったか

日清戦争から更に 40 年後の 1937 年（昭和 12 年）に発生した「南京大虐殺」の頃には、日本軍が末期的症状をきたして軍規が乱れていたのに対し、日清・日露の戦争の頃は、軍律がよく保たれていたはずである。というのは、私はかつて読んだことのある司馬遼太郎の歴史小説「坂の上の雲」に、以下のような記述のあることを知っている。

――日本は、日露戦争を通じ、前代未聞なほどに戦時国際法の忠実な遵奉者として終始し、中国人の土地財産をおかすことはなく、ロシアの捕虜に対しては国家をあげて優遇した。その理由の最大のものは幕末、井伊直弼が結んだ安政条約という不平等条約を改正したいということにあり、ついで精神的な理由として、江戸文明以来の倫理性がなお明治期の日本国家に残っていたせいであったろうと思われる。（森野注：これは日清戦争の時にも同様であるはずだ）

1900 年（日清・日露両戦争の間の時期）には中国で発生した義和団の反乱蜂起で、列強八ヵ国（英米露独仏伊墺日本）が天津・北京へ派兵し、義和団の反乱を鎮圧した。この「北清事変」とよばれる戦闘における八ヵ国の軍隊の行状についても、司馬はこう書いている。

――キリスト教国の側からいえば、いわば正義の軍隊である。しかし、入城後に彼らがやった無差別殺戮と掠奪のすさまじさは、近代史上、類を絶している。彼らは民家に押し込んで掠奪の限りをつくしたばかりでなく、大挙して宮殿にふみこみ、金目のものはことごとく奪った。ただし、日本軍のみは一兵といえども掠奪をしなかった。日本国は条約改正という難問題をかかえており、「文明国」であることを世界に誇示せねばならず、そのため国際法や国際道義の忠実なまもり手であろうとした。

以上の様に、日清戦争、北清事変から日露戦争までの日本の軍隊は軍律をよく守り、現地の民衆にも紳士的に振る舞った、と司馬は書いているのだ。

しかし、インターネット情報「『坂の上の雲』のどこが問題なのか？」（醍醐聡著）では旅順虐殺事件について以下のように伝えている。
http://sdaigo.cocolog-nifty.com/blog/2010/05/9-a402.html

日本軍が旅順市内に入った 1894（明治 27）年 11 月 21 日以降の４～５日間にわたって、抗戦の意志がほとんどなかった清国兵士のみならず、逃げまどう民間人も無差別に殺戮するという事件が起こったのです。その時の＜地獄に等しき惨状を目撃し＞と、本国に伝えた外国新聞記者の手記等を収集した井上晴樹『旅順虐殺事件』（1995 年、筑摩書房）によれば、市内に突入した日本軍兵士が、その３日前の戦闘で生け捕りにされた日本兵の生首が道路わきの柳の木に吊るされていたのを目撃して激情し、復讐心を募らせたのが引き金になったとのことです。それはともかく、日本兵は民家の隅や道路わきでおののきながら命乞いをする住民や小売商人を捕虜にするのではなく、サーベルや銃で次々と殺戮していったのです。虐殺された人数については諸説ありますが、中国が建立した旅順の万忠墓には「１万８百余名」と刻まれています。
このような史実を知れば、司馬が「坂の上の雲」で被侵略国の相手軍の多数の兵士・民間人が日本兵によって虐殺された事実を伝えず、「日清戦争が受け身の戦争だった」などと解説することがいかに史実を歪めるものか明らかです。

同じ事件について「誤謬だらけの『坂の上の雲』（高井弘之 合同出版）」でも、従軍兵士の陣中記を引用して以下のように紹介している。

――支那兵と見たら粉にせんと欲し旅順市内の人と見ても皆討ち殺したり、故に道路等は死人のみにて行進するにも不便の倍なり、人家に居るも皆殺し、大抵の人家二、三より五、六人死者のなき家はなし、其の血は流れ其のにおいも甚だ悪し。

こうして、司馬のいう「日本軍は戦時国際法に忠実だった」は疑わしく思えてきた。

上の絵は日本人画家によるもの

だから、私が旅順で見た「万忠墓記念館」の展示が真実を伝えていることは間違いなさそうである。私は司馬遼太郎に騙されていたのか？　いや、いくら高名な国民文学作家の作品であろうとも、近現代史の評価が未だ十分に定まっていないこと、また歴史文学とはいえしょせん小説なのだから、その内容をすべて無批判に信じた私が軽率だった、と言うべきだろう。

■司馬の朝鮮侵略についての歴史認識

以下のような司馬への批判がある。

「坂の上の雲」のどこが問題なのか（３）」（醍醐聡著）

からもう一度その指摘点を紹介しよう。

http://sdaigo.cocolog-nifty.com/blog/2010/05/9-25a1.html

――「坂の上の雲」はＮＨＫで映像化されたが、司馬遼太郎は生前、

「この作品はなるべく映画とかテレビとか、そういう視覚的なものに翻訳されたくない作品でもあります。うかつに翻訳されると、ミリタリズムを鼓吹しているように誤解されたりする恐れがありますからね」（司馬遼太郎『「昭和」という国家』1998 年、日本放送協会出版、34 ページ）」

と述べ、各方面から寄せられた原作の映像化の申し出を断り通したことは今日ではよく知られています。しかし、ここで、注意する必要があるのは、生前、司馬がドラマ化を拒んだという事実だけではありません。それ以上に注目すべきなのは原作で表された司馬の＜朝鮮観＞がその後、大きく揺らいでおり、その揺らぎは朝鮮観にとどまらず、日清・日露戦争を＜祖国防衛戦争＞と規定した司馬の根幹的な歴史観にも及んでいます。司馬は 1998 年に日本放送協会出版から刊行した上記の書物の中で韓国併合について次のように語っています。

「われわれはいまだに朝鮮半島の友人たちと話をしていて、常に引け目を感じますね。これは堂々たる数千年の文化を持った、そして数千年も独立してきた国をですね、平然と併合してしまった。併合という形で、相手の国家を奪ってしまった。こういう愚劣なことが日露戦争の後で起こるわけであります。むろん朝鮮半島を手に入れることによって、ロシアの南下を防ぐという防衛的な意味はありました。しかし、日露戦争で勝った以上、もうロシアはいったんは引っ込んだのですから、それ以上の防衛は過剰意識だと思うのです。おそらく朝鮮半島の人びとは、あと何千年続いてもこのことは忘れないでしょう。」（37 ページ）

朝鮮民族のことを「堂々たる数千年の文化を持った、独立してきた国」と語る司馬の後年の朝鮮観と、「韓国自身、どうにもならない。李王朝はすでに五百年もつづいており、その秩序は老化しきっているため、韓国自身の意思と力でみずからの運命をきりひらく能力は皆無といってよ

かった」（第二分冊、50 ページ）という朝鮮観はどのような後知恵を以てしても一貫しません。このような後年における朝鮮観の転換が『坂の上の雲』のドラマ化を拒んだ司馬の意思の根底にあったのかも知れませんが、それについて司馬は何も語っていません。

このように、醍醐氏は朝鮮史に関して終始一貫性を欠いた司馬の態度を問題視している。
ただし、司馬の「坂の上の雲」を批判している上記した２人の論客について、その歴史観に注意しなければならないところがある。

醍醐聡氏（「『坂の上の雲』」のどこが問題なのか？」の著者）は、
○「教師が卒業式等で日の丸・君が代に起立斉唱しない自由を認めるべきだ」と主張している。
○ 2018 年に下された韓国大法院の判決「徴用工の日本企業への損害賠償要求」を擁護している。

高井弘之氏（「誤謬だらけの『坂の上の雲』」の著者）は、
○「新しい歴史教科書をつくる会」に基づく歴史教科書を愛媛県が中学校へ導入することに反対している（【森野注】「新しい歴史教科書をつくる会」への批判には私も同意）。
○ 独島（竹島）は韓国領である。（【森野注】日本政府は竹島を韓国領だといったことはない）。
○ 「日本は日露戦争直前には、世界の五大海軍国の末端につらなるようになった。（つまり）いままで持ったこともない第一級の戦艦六隻と、第一級の装甲巡洋艦六隻をそろえ、いわゆる六六制による新海軍をつくった。日本人は、大げさにいえば飲まず食わずでつくった」と書いている司馬を、日本の国民・民衆から搾り取った「血税」を国民に還元することなく、軍事費に注ぎこんだと批判（【森野注】海軍の近代化への努力によりバルチック艦隊を撃破した大戦果にまで、アンダーラインのような酷評をするのはい過ぎでは？）。
○ 第二次世界大戦後、日帝支配に替わってアメリカが朝鮮を侵略した（【森野注】アメリカが韓国を、ソ連が北朝鮮を、それぞれ援助したのだ。そして、ソ連（＋中国共産党政府）の後押しで金日成軍が南侵したので朝鮮戦争へと発展したはず）。

などなど、醍醐聡氏と高井弘之氏の歴史観には同意し難いところがあるのだ（二人はかなり左寄りの論客らしい）。このような思想の人が司馬遼太郎「坂の上の雲」を酷評しているのだから、注意を要する。そこで、もう少し中道的（リベラルな？）な意見はないものかと、調べてみた。

1 2 3 4 5 6

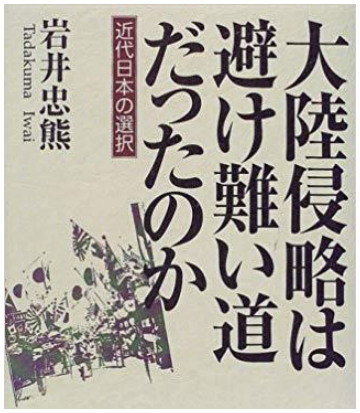
司馬のこの作品から	「坂の上の雲」を批判する多くの評論書 （私が把握した以外にも類似の批判書があるのだろう）

私が読んだ本は２と６であるが、インターネットで司馬の「『坂の上の雲』を批判」しているそ

の他の論文の要約や紹介も幾つか読んでみた。それによると、最大公約数的論調は司馬遼太郎が日清・日露戦争時の「朝鮮侵略」を軽視あるいは殆ど無視した、と批判していることがわかった。だから、日本が日清・日露の戦争時から朝鮮侵略の意図があったし、更に 1910 年の「日韓併合」により、朝鮮を属国（植民地）化した事実は、やはり認めねばならないだろう。

■日本はアジア侵略という道しかなかったのか？

岩井忠熊氏は「大陸侵略は避け難い道だったのか」（かもがわ出版）というタイトルの本を書いている。



岩井忠熊：京都大学から学徒出陣した元特攻隊員。日本近代史を専攻とする歴史学者。立命館大学教授・副学長を歴任。

私が読んだ岩井氏の著書『大陸侵略は避け難い道だったのか』の導入部を紹介：

――19 世紀以降、とくにその後半から、先進資本主義諸国は帝国主義化し、世界を分割・支配し、あちこちに植民地・従属国をひろげました。それは争えない事実ですし、一つの経済法則の貫徹であったことは疑いえません。

しかし同時に、世界には高度の資本主義国であっても、領土膨張主義をとらず、中立をつらぬいたスイスやスウェーデン（ほかにもデンマーク、ノルウェー、フィンランドなどをあげることができる）のような例があります。今まではこのような国の存在はとかく例外とされてきました。またそのような国が兵器を輸出したり、金融を通じて戦争当事国から利益を得たり、かならずしも看板どおりの平和国家ではないことも指摘されてきました。そうはいってもそれらの国が侵略をしなかった事実はだれも疑いえない事実です。

そうした事例を謙虚に見れば、19～20 世紀にも、ある条件のもとで、一定の政策をとれば、非侵略平和主義国家として資本主義を発展させる可能性がまったくなかったとはいえません。近代日本、とくに明治前半期には、さまざまの政治思潮と運動が存在しました。その中にはすくなからぬ平和主義・非侵略論の主張もあったのです。

そうした主張がどうして国家を動かす主要な潮流となることができなかったのでしょうか。私は今までとかく無視されてきたそれらの思潮を紹介し、そうした主張の現実性を検討し、近代日本にとって侵略がただひとつの避けえない道であったか否かについて述べてみたいと思います。

岩井氏はこのような出発点から日本近代史を検証している。岩井氏の本は全 180 ページの大部なので詳述できない。明治時代の政府と議会、民間の時局判断について以下の要点のみを抽出して記述する。＜以下の写真はインターネットより＞

１　横井小楠（熊本の儒学者）は、一種の世界平和主義者、侵略否定論者で、もともと江戸幕府のような「血統」による支配に批判的な共和主義者的思想の持主だった（維新政府で活躍する前に暗殺されてしまった）。

２　西郷隆盛、板垣退助、江藤新平らは、征韓論をとなえた。誕生したばかりの維新政府は、内政問題（廃藩置県、武士階級の無禄化など）で国内的一致が困難であるだけに、対外問題での成功で国家的威信を高めることが必要だった。しかし、米欧視察から帰国した「内治先決論」の大久保らに反対され、1873 年（明治６年）に下野した。

　しかし、反対した大久保も、薩摩などの不平士族対策のために、翌年には「台湾出兵」し、さらにその後、朝鮮のソウル近くに軍を派遣して「江華島事件」をおこし、日本に有利な日朝修好条約を締結した。この後、日清・日露の戦争で朝鮮への支配を強めることになる（注）。

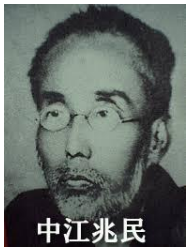
（森野注）江戸時代 270 年間、対朝鮮交渉の窓口は対馬藩（宗氏）が担当していた。その対馬藩に仕えた儒者「雨森芳洲」（あめのもりほうしゅう）の功績を忘れてはならない。私は雨森芳洲の故郷にある記念館を訪ね（下の写真）、日朝友好に献身した彼の人柄に感銘をうけた。彼は朝鮮語に堪能で、朝鮮を対等な友好国として誠実な外交を行った。

　一方、明治政府の外交官は雨森とは異なり、朝鮮を頑迷固陋な未文明国と見下して武力により威圧することしか考えなかったことが、日朝関係にとって不幸なことだと思う。

雨森芳洲庵（滋賀県長浜市高月町）

３　植木枝盛は、自由民権派の代表的理論家で、朝鮮問題で日本の強圧的外交や武力行使論を批判し、民族の分離・独立を主張した（1880 年）。

植木枝盛


中江兆民

４　中江兆民は、欧米列強の東アジア侵入が激化する情勢の中で、日本が平和な立場をつらぬきつつ独立国家として生存が可能か否かという難問を真剣に考えた代表者であった。彼は非侵略的・平和的な道を歩むためには真に民主的な立憲政治の必要性を求め、新聞・雑誌・著書・演説で国民に働きかけた。そして、「外交論」を著して日本が欧米各国と同盟するのを否定し、欧米の東アジア支配に対して中立主義を貫くべきだと主張した。

５　勝海舟は日清戦争に反対した。勝は幕末以来日本海軍の育成に尽力した経

勝海舟

験から、日本海軍の実力では海外侵略など不可能だという軍事的見識の持ち主であった（注）

（森野注）明治の海軍力は勝の予想を超えて強大となり、日清・日露の海戦で大勝した。しかし、この海軍力は日本の身の丈に合ったものなのだろうか？

6　谷干城（たにたてき；軍人出身で帝国議会の貴族院議員）は、保守主義者・国粋主義者ではあるが、日本が海岸線での防御のみの専守防衛に徹すべきであり、朝鮮や清国のような大陸への派兵に反対した。その論拠は、大陸侵略のための軍備増強は貧しい農民への重い課税負担に耐え得ないと考えるからだ。

谷の考え方にもっとも近かったのは新聞「日本」の社長陸羯南（くがかつなん）であった（注）。陸は「国民論派」と自称し、新聞「日本」の記者の中には後年大正デモクラシーの代表者たち（例えば長谷川如是閑）がいた。

（森野注）「坂の上の雲」の主役の一人「正岡子規」は、新聞「日本」の社員となり、陸の支援をえて明治時代の短歌形式の刷新に寄与したことで知られている。

7　内村鑑三は、文明国日本が野蛮国清をうつ「義戦」だと主張して日清戦争を支持したが、戦勝後に日本が台湾割譲・賠償金獲得などの「不正義」をおこなったことから、戦時中の言論を反省し、平和・非戦を訴えた。なお、彼は後に天皇の「教育勅語」に不敬をはたらいたとして教職を追われた。

8　黒岩涙香（くろいわるいこう）は、自ら経営する「萬朝報」紙上で、日露非戦論をうったえた。また、社会悪を糾弾する大キャンペーンを展開し、足尾鉱毒事件で古河財閥に抗議した田中正造を支援した。「萬朝報」の記者には内村鑑三の他に無政府主義者幸徳秋水もいた（秋水は後年「大逆事件」で死刑となった）。

9　1889 年（明治 22 年）帝国憲法発布

プロシア風憲法を参考にし、強大な天皇大権により議会の発言力を制限し、維新政府の官が民を抑圧する性格を憲法に持ち込んだ。また、天皇が陸海軍を統帥するシステムが確立し、昭和期の陸軍が政府議会を無視して夜郎自大化する弊害のもととなった。

10　1890 年（明治 23 年）に貴族院と衆議院による二院制の第一回帝国議会が始まる

明治憲法の規定により帝國議会では、政府の予算は議会の承認をえなければならなかった。

日清戦争以前の初期議会では、政府は軍備拡張（特に建艦費）の予算を提出。一方、「衆議院」で多数を占めた民権派野党勢力は「民力休養」（地租軽減；重税にあえぐ国民の声を代弁）を主張して藩閥政府と真っ向から対立した。結局、政府は天皇の詔勅という奥の手をつかって予算案をとおした。もし、建艦のための予算が成立しなければ、政府も陸海軍も日清戦争の開戦を決断できなかったはず。

日清戦争以後には、政府は軍事力強化のために「地租大幅増大」へと方針がエスカレートした。議会はこれに真っ向から対立したが、政府が天皇の詔勅を取り付けて増税を押しとおした。

現代の日本政府の防衛費は国家予算（一般会計＋特別会計）の 2.6%に過ぎない。しかし、明治 20 年代の軍事予算は国家予算の 30～50%を占めていた。現代の我々からは信じ難いほどの軍事力偏重である。

以上、岩井氏は著書で『大陸侵略は避け難い道だったのか』と問いながら、明治期の議会・軍・新聞・民間の各界から政府に反対する多数の意見を紹介している。とりわけ重税にあえぐ農民をバックに議会が、薩長藩閥政府の軍事増強を目論む予算案に抵抗したことが注目される。しかし、議会の抵抗が貫徹されなかった理由のひとつは軍閥独裁を可能とさせた天皇主権の帝国憲法にあった。それに対し、民間の言論人中江兆民は、非侵略的・平和な道をあゆむためには真に「民主的な立憲政治」を実現しなければと考え、その実現に努力したことを、岩井氏は重視している。

もしかしたら、兆民がめざす議会制民主主義のモデルは英国であったかもしれない。

	制定年	男	女
英国	1884 年	成人の 70%	0
	1918 年 普通選挙	21 歳以上	30 歳以上
日本	1890 年 (M23)	成人の 1.1%	0

そこで、わたしは、19 世紀末の日英の有権者数の統計をしらべてみた。（左表）

日本で帝国議会がはじまり、第一回の衆議院議員選挙があった 1890 年には、有権者は成人男性のわずか 1.1%にすぎなかった。選挙権資格が 25 歳以上で直接国税 15 円以上を納めた男子に限られていたからである。一方、同じ時期の英国では、女性は未だ選挙権がなかったが、成人男性の 70%が有権者であった。更に、日本では伊藤博文や山縣有朋などの元老が首相を務める薩長藩閥独裁政治であったのに対し、英国では選挙で選ばれた議員による政党政治が行われていたなど、日英の民主的政治風土の差は歴然としている。

しかし、ここで笑うに笑えない現実がある。中江兆民が理想としていたであろう議会制民主主義の発達した、それゆえ国民の声が議会に反映されていたはずの英国は、じつはこの時代、世界最強の帝国主義国であり、非白人国を侵略して植民地を獲得することが重要な国家政策としていた国であったのだ。選挙民である英国人（すなわち白人）は、アジア人など下等な人種とみなして支配し、搾取すべき対象としか考えていなかったのではないだろうか？（注）

（森野注）だから、少々皮肉めいた表現をするなら、中江兆民は理想の議会制民主主義国として英国に憧れ、一方、明治政府は理想の侵略国の手本として英国に見習ったのではないだろうか？

そのような時代に一人のアジア人が英国にいた。1900 年（明治 33 年）に、国費派遣により英国に留学した夏目漱石である。二年間のロンドン滞在中白人に囲まれて生活していた彼は、黄色い顔の貧相な風体の自分に、人種的なコンプレックスを感じて苛立ち、ほとんどノイローゼを患っていたらしい。偉大な文豪漱石にしてこうである（注）。

（森野注）余談ながら、私は 12 年間中国で生活した。教師生活をして４、５年がたつころ、日本の友人に会うと「お前は、だんだん中国人らしくなっているよ」と、からかわれた。私は笑って同意した。元々は中国で教師の実績を積み、いずれ英国など英語圏に雄飛したいとの夢があった。しかし、中国生活数年にして、もうそのような思いは消え失せ、元気なうちは中国に住み続けたいと思うようになった。中国の歴史と文化に魅せられたこともあるが、同じ黄色い顔をした人々に囲まれていることに、安堵感や心地よいものを感じたからだ。夏目漱石の苦悩がそれとなく察せられる。

結果として、明治政府は中江兆民たちの主張に耳を傾けることなく、侵略戦争への道を歩むことになったのだろう。岩井氏が、彼の著書『大陸侵略は避け難い道だったのか』で追及した理想は、厳しい現実のなかで果たせえぬものに終わったように思う。

ついでながら、不平等条約解消のために、文明国たらんとして明治政府が行った鹿鳴館舞踏会を西欧人が揶揄した絵と、日本が欧米列強と一緒に中国を侵略していた頃の戯画を下に示そう。

ロンドンの下町の下宿で、夏目漱石がふと鏡に映った自分の顔をどう思ったのか？
白人女性のまばゆいばかりの白い肌は、ロンドンのスモッグで遮られた鈍い陽光のためだと想像したそうだ。

白人世界の厳しい目

日本なかなか気張っとる！

■それでも司馬遼太郎の「坂の上の雲」の魅力

最後に、司馬遼太郎の「坂の上の雲」に関する話題をもう一度のべて終わりにしたい。

私がこの長編小説を読んだのは 40 歳ころだった。軍閥政府の雄「薩長土肥」からは傍系の伊予

松山藩の下級士族出身である正岡子規と秋山兄弟が青雲の志を抱いて故郷を後にし、それぞれの夢を実現していく、そして、若者の成長と明治の新国家の発展が密接に関わりながら、同時進行していく物語である。だからある種の Bildungsroman（ ビルドゥングス・ロマン）といっていいだろう。

わたしは、「坂の上の雲」を読み始めたとたん、面白くておもしろくて、読み終えるまでの二週間くらい、寝不足で会社に通っていたのを懐かしく思い出す。

この小説はその後、NHK でテレビドラマ化された。私はそのころまだ中国にいたので、観ることができなかった。しかし、著作権フリー（？）の中国では、インターネットに無料で配信されていたので、学生に頼んでダウンロードしてもらった。スーパーインポーズが「繁体字」なので、台湾か香港あたりでコピーして作成したものなのだろう。毎回、

――まことに小さな国が開花期を迎えようとしている。

で、始まる全 13 巻のテレビ動画を私はパソコンに内蔵して、今でも時々観ている。

その最終回「日本海海戦」で、東郷平八郎の連合艦隊が秋山真之参謀の編み出した丁字戦法により、バルチック艦隊を完膚なきまでに撃沈させたシーンは、やはり何度観てもいい！　私はにわか愛国者になった気分で興奮した。

その後、プロローグちかくのところで次のようなナレーションがあった。

（明治とは・・・）これほど楽天的な時代はない。
むろん、見方によってはそうではない。
庶民は重税にあえぎ、国権はあくまで重く、民権はあくまで軽く、
足尾の鉱毒事件があり、女工哀史があり、小作争議がありで、
そのような被害意識の中から見れば、これほど暗い時代はないであろう。
しかし、被害意識でのみ見ることが庶民の歴史ではない。

明治はよかったという。

降る雪や 明治は　遠くなりにけり

という中村草田男の 澄みきった色彩世界がもつ明治が 一方にある。
この物語は、その日本史上類のない 幸福な楽天家たちの物語である。
楽天家たちはそのような時代人としての体質で、前をのみ見詰めながら歩く。
登っていく坂のうえの青い天に もし一朶の白い雲がかがやいているとすれば、
それのみを見つめて　坂を登っていくであろう。

以上のナレーションはなかなかの名調子であり、このドラマを結ぶにふさわしい。

今回のリポートで、司馬の歴史記述が不十分で、読者に誤解をあたえる部分がたしかにあることを私は紹介した。

上のナレーションでも「・・・これほど暗い時代はないであろう。しかし、被害者意識の中でのみ見ることが庶民の歴史ではない」と述べているのは、不適切な表現だからカットすべきだと思う。というのは、このテレビドラマは、庶民の生活を描いたものではなく、三人の主人公をはじめ多くの登場人物は、元士族階級であり、著名な明治人であるし、特に日清日露の戦争では国

家そのものが主役なのだから。

司馬は第二次世界大戦に従軍した自らの体験により、昭和の軍隊が合理性を欠いた精神主義に陥ったために大きな誤りを犯したと考えている。それと較べて明治時代の人々は合理的精神を持ち着実に理想を追求しているーーだから、司馬は草田男の＜降る雪や 明治は　遠くなりにけり＞の詩に感情移入して、明治時代をノスタルジックに回想しているのだろう。

明治は司馬が語るほど、誤謬のない時代ではなかったが、後の時代よりは、よりましではあったか。栄光の明治時代の陰で、日本の侵略で迷惑を被った国や国民のことを慮りながら、という限定つきで、司馬のこの作品を、歴史書ではなくて小説として味わいたいと思う。

（了）

（お断り）本リポート中に引用した文は、コンパクトにするために、私が勝手に省略した部分があります。